

# 「荻窪の記憶」

## こぼれ話なし

# 荻外荘を考える

荻窪地域にとって、今年の大きな出来事に荻外荘の公開がありますが、みなさん、どのような関心をおもちでしょうか。

荻外荘の地元、筆者も役員を務める荻窪東町会では、住民が荻外荘のあり方について考え、語り合う場があつてもいいと、昨年11月、区の協力を受け、荻窪地区区民センターでワークショップを開催しました。

これは、もともと荻外荘の保存が当町会を含む10町会の呼びかけがきっかけになって実現したことを踏まえたもので、当時の新聞は「歴史を考え、語り継ぐ場として後世に継承したいと、杉並区は、昭和史の舞台となつた元首相、近衛文麿

の元私邸「荻外荘」を本来の姿に復元する」と伝え、昭和史に詳しい作家・保坂正康氏のこんな言葉を載せています。「荻外荘は昭和史の貴重な遺産。東条（陸軍大臣）が対米開戦を主張するのに近衛は外交交渉を譲らない。近衛はそんなに戦争したければ軍人だけでやるがいい、とまで言った。『戦争か、外交交渉か』を決める舞台にもなった。」（2014年10月25日・朝日新聞）

戦争をめぐる昭和史と切り離せない荻外荘ですが、地元荻窪の住民にとっては、武蔵野の面影を残す町の成り立ちを語ってくれる貴重な存在でもあります。

そもそも、荻外荘のルーツは、日本の近代医学の父といわ

れたお雇い外人・ベルツ博士の後を継いで、帝大医学部の教授になった入澤達吉が、明治末、善福寺川左岸の丘に土地を買い、小さな家を建てたことにはじまります。

このルーツが語るように、武蔵野の農村だった荻窪は、清涼な空気と富士を望む高台の眺望から明治のエリートたちに別荘の適地として見いだされ、関東大震災後は文化人も多く住む郊外住宅地へと発展してきました。荻外荘を「歴史を考え、語り継ぐ場」とするなら、日本の近代化が生んだ郊外住宅地・荻窪の変遷についても語られるべきではないでしょうか。

これまで、荻外荘の復元については、工事の節目節目に区の説明会がありましたが、もっぱらハード面についての説明が主で、荻外荘を通して何を伝えるのかなどについて言及するところはありませんでした。そこで、冒頭に紹介したワークショップでは、これまで避けられてきたテーマも取り上げ、必ずしも正解のない問をめぐっても意見を出し合うよう心掛けました。以下は、当日配ったアンケートに書かれた参加者の声です。

「何を目的に改修し、未来につなげていくのか、なぜ、荻外荘を残すのか、いろいろ考えさせられた」「荻外荘を起点に平和教育。戦争は、なぜ、起きてしまったかを勉強する場にしてはどうか?」「普段、目にしながら、よく知らなかつたことが聞けてよかったです。分野別に多角的な話し合いなされて面白かったです」「コモンの観点からも良い場と感心しました」「こういう集会があったのは、とてもよかったです。荻窪を大事にする人が多く、安心しました」

荻窪東町会では、第二回のワークショップを春以降に計画しています。詳しい情報は、荻窪東町会のホームページ <https://荻窪東町会.tokyo> をご覧ください。



ワークショップ「荻外荘を知り、考える」